

TOEFL-ITP と SILL 及び英検 CAN-DO Lists を用いた 英語学力と学習ストラテジー及び学習意識から見た 一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究 (2015)

A Cross-Sectional Study on the Differences Between General Students and
Returnees in Terms of English Proficiency and Learning Strategies and
Consciousness of Learning Using the TOEFL-ITP, the SILL and
the EIKEN CAN-DO Lists
(2015)

木村松雄

Matsuo KIMURA

遠藤健治

Kenji ENDO

I. 研究目的

近年多様化の一途にある学生の背景と学習意識、英語学力、用いる学習ストラテジーの関係を入学前に海外生活体験をもつ帰国学生と海外生活体験を持たない一般学生の相違点に着目し、これを客観的に捉えることにより、教育改革の中で今後ますます重要視されるコミュニケーション能力の育成を通じた生涯学習の源となる「自己教育力」の育成に繋がる大学及び、小学校、中学校、高等学校の英語教育の改善への道を探る。本研究の根底には、学習意識が学習ストラテジーを規定し、その結果が英語学力に影響を及ぼすであろうという仮説があり、海外生活体験をもつ帰国学生と海外生活体験をもたない一般学生との間に如何なる相違があるかを探るものである。どのような意識が、どのような学習ストラテジー使用を促し、その結果どのような特徴をもった学力を形成するかに関心がある。最終的な目標は、日本で育つ学習ストラテジーと海外生活（異文化）体験をしないと育ちにくい学習ストラテジーの相違を明らかにすることとその教育的応用の提案である。

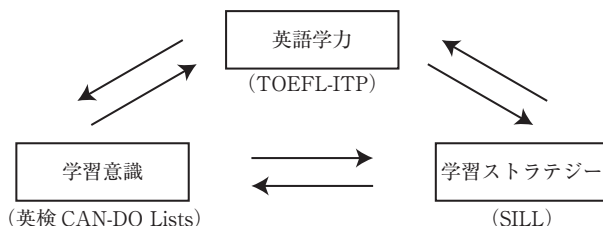


図 1

II. 研究の意義

直接的には、特定の学習集団（入学直後の英米文学科 1 年生）の英語学力（TOEFL-ITP）、学習背景、学習意識（英研 CAN-DO Lists: 準 1 級（短大終了時）+ 1 級（4 年生大学終了時）、用いる学習ストラテジー（SILL）の相互の関係の把握にある。間接的には、得られた成果が学内外における今後の学習者を中心とした英語教育開発への示唆に、さらには、教育改革下にある小学校、中学校、高等学校、海外の日本人学校、とりわけ、一貫性を制度とした英語教育構想を持っている全国の小中一貫校、中高一貫校、小中高一貫校へは、国際化、グローバル化の中にあって今後ますますその数を増やしつつある異なる背景をもつ学習者の環境と発達に焦点をおいた新たな英語教育理念、教育方針、そして真に自律した学習者を育成するための一貫制英語教育を構想する際の示唆となり得る点にあると考えるものである。

III. 第 2 言語習得研究における学習ストラテジーの位置

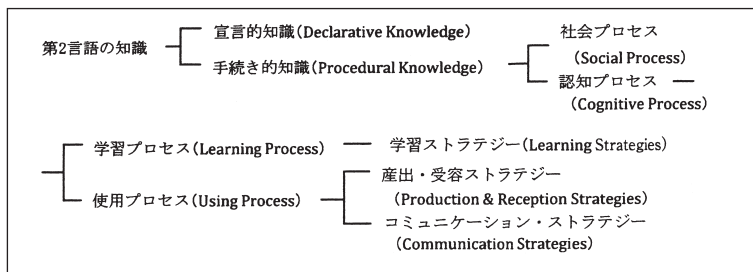


図 2

Faerch and Kasper (1983) においては、第 2 言語習得を目指す学習者には 2 種類の知識があるという。即ち、「宣言的知識 (Declarative Knowledge)」と「手続き的知識 (Procedural Knowledge)」である。「宣言的知識」は、「知る・理解する知識」で、内在化して自分のものにした第 2 言語のルールと記憶された言語のチャンクからなる知識である。

「手続き的知識」は、「使う知識」で、第2言語の習得あるいは使用のために、第2言語のデータを処理する際に用いるストラテジーやその手順についての知識である。「手続き的知識」は、さらに「社会プロセス (Social Process)」と「認知プロセス (Cognitive Process)」に枝分かれすると考えられる。「社会プロセス」は、相互交渉の機会を処理する際に、学習者が使用する様々な行動的なストラテジーからなるプロセスを意味する。「認知プロセス」は、学習者が第2言語のルールを蓄積し内在化したりするなどの精神的なプロセスを意味する。さらに「認知プロセス」は、「学習プロセス (Learning Process)」と「使用プロセス (Using Process)」に分かれる。「学習プロセス」において、学習者は現在の知識と新たなインプットを用いて、新しい第2言語のルールを蓄積し自動化する。「使用プロセス」は、さらに「産出・受容プロセス (Production/Reception Strategies)」と「コミュニケーション・ストラテジー (Communication Strategies)」に分化する。「産出・受容ストラテジー」(Tarone:1981)は、学習者が現在持っている第2言語の知識を有効かつ最小限の努力によって使用する時に用いるストラテジーを指す。また「コミュニケーション・ストラテジー」は、コミュニケーションを持続・継続しようとする時に用いるストラテジーであり、補償的な働きをするものであり、時として「補償ストラテジー (Compensation Strategies)」を意味することもある。

さて、学習プロセスを司る「学習ストラテジー」は、総じて、学習者がどのようにして第2言語の知識を蓄積し、さらに蓄積した規則を、どのようにして自動化するかに関わる法則と考えられる。よって、「学習ストラテジー」は、使用プロセスを司る「コミュニケーション・ストラテジー」や「産出・受容ストラテジー」とは対照的な存在と言えよう。端的に言えば、「学習ストラテジー」は、第2言語を学習し獲得するためのストラテジーであり、一方「コミュニケーション・ストラテジー」や「産出・受容ストラテジー」は、第2言語を使用するために用いるストラテジーであると言えよう。因みに「学習ストラテジー」は、心理学を基礎に置き、「コミュニケーション・ストラテジー」は、コミュニケーション学に基礎を置いている。どちらも認知プロセスを形成する重要なプロセスであるが、言語のもつ概念やルールを記憶したり、一般化したりすることは、およそ全て「学習ストラテジー」によって行われるため、教授・学習レベルにおいては、まず「学習ストラテジー」の習得及び開発（特に子供を対象としたストラテジーの開発）が重要な課題であると言えよう。教授・学習レベルにおける基本的な「コミュニケーション・ストラテジー」は、学習内に含まれる様々なタスク（課題）の設定によって対応可能と考えられる。因みにこれまでの本研究の成果として、Successful Learners（学習に成功する学習者）が目的に応じて使用する「メタ認知ストラテジー (Metacognitive Strategies)」を英米文学科の学生は海外生活体験の有無に拠らずよく使用することと、さらに英語力が高度化し自動化の域に達したと考えられる学習者の多くは、意識的な学習方法は概して採らず、その結果使用する学習ストラテジーの数

も少なることが判明している。英語力が高度化し自動化の域に達したと考えられる学習者には、教養課程においても、EGP (English for General Purposes) から ESP (English for Specific/Special Purposes) とりわけ EAP (English for Academic Purposes) への比重移動が可能となるようなカリキュラムの改革が必要になってきているわけである。この点は改めて提案で触れることとする。

IV. 研究方法

分析対象は、2015 年度に入学した英米文学科学生のうち、下記測度への回答が得られた 315 名 (男性 77 名、女性 238 名)。海外生活経験については、その期間が 0 ヶ月を「なし群」、1 ～ 23 ヶ月を「短期群」、24 ヶ月以上を「長期群」とすると、各群の人数は、なし群男性 47 名、なし群女性 146 名、短期群男性 8 名、短期群女性 32 名、長期群男性 22 名、長期群女性 60 名、計なし群 193 名、短期群 40 名、長期群 82 名となっている。海外経験者数は 2013 年度入学生の総計で 38% 在籍のところ 2014 年度入学生では 28% と減少したが、2015 年度入学生では 39% となり、2013 年度の水準に戻った。このような海外生活経験者の比率そのものが年度によって異なり、それは以下の分析結果にも反映されると思われる。海外生活経験の英語学習に及ぼす影響を検討するには、2013 年度の報告で行ったように、今後何年かのデータを累積して分析する必要があるだろう。

従属変数は、英語学力を測定するものとして TOEFL-ITP を実施し、その 3 つの下位得点 (Listening、Structure、Reading) および得点 (Total) の 4 変量を採った。配点は、Listening 68 点、Structure 68 点、Reading 67 点、Total 677 点 ($((\text{Listening} + \text{Structure} + \text{Reading}) \times 10) \div 3$) である。

英語学習のために使用しているストラテジーを測定するためには、木村・遠藤 (2010;2011;2012;2013;2014) と同様に Oxford (1990) の開発した SILL の日本語版を一部変更して実施した。評価は「全く違う」～「全くその通り」の 5 段階とした。

大学入学時に「どのような英語技能にどれだけの自信を持っているか」を調査するために、英検 CAN-DO list42 項目を用いた。評価は、ストラテジーと同様に「全く違う」～「全くその通り」の 5 段階とした。また 4 技能についてどの程度自信を持っているかを「あなたが最も自信のある技能は何ですか」「あなたが最も自信のない技能は何ですか」という設問の下に回答を求めた。選択肢は「聞く」「話す」「読む」「書く」である。この設問は本年度から設けたものである。

以上の測定は、年度初頭に履修手続きの一環として行われた。

V. 結果と考察

1. 英語学力について

まず、全体 315 名の結果の基礎統計量を求めると、Listening では最低点 33、最高点 68、平均値 49.87、標準偏差 6.75、歪度 0.18、尖度 -0.10、Structure では最低点 33、最高点 68、平均値 48.84、標準偏差 6.42、歪度 0.32、尖度 0.55、Reading では最低点 31、最高点 66、平均値 49.00、標準偏差 5.68、歪度 -0.32、尖度 0.73、TOTAL では最低点 323、最高点 663、平均値 492.26、標準偏差 55.37、歪度 0.22、尖度 0.36 となった。昨年度の入学生と比較すると、やや得点の範囲が広がったようである。

4 技能への自信について、「あなたが最も自信のある技能は何ですか」に対する回答を集計すると、聞く：34.2%、話す：14.2%、読む：29.7、書く：19.6%となった。「あなたが最も自信のない技能は何ですか」では、聞く：12.0%、話す：47.5%、読む：18.0、書く：19.6%であった。聞く、読むといった受動的な行動については自信を持っており、話すという能動的な行動については半数近くが自信を持っていなかった。

海外生活期間と性別によって分割した群ごとに、平均得点を求めると表 1 が得られる。表 1 の下段は各 TOEFL 得点を従属変数として、性別×海外生活期間の 2 要因分散分析を行った結果および Tukey による多重比較の結果を表記したものである。性差に関しては、Reading 以外の得点において有意差が検出され、すべて男性の方が女性よりも高得点という結果となった。海外生活期間に関しては、これまで同様、すべての得点において海外生活期間の効果が顕著に表れた。Listening、Structure、Total では、なし群より短期群の得点が高く、短期群よりも長期群の得点がそれぞれ有意に高くなっている。Reading でもなし群よりも短期群と長期群の方が得点が高い（短期群と長期群の間には有意差は検出されなかった）。

表 1. TOEFL の結果の基礎統計量と有意差検定

対象		Listening		Structure		Reading		Total	
性別	海外生活経験	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
男性	なし群	46.9	7.02	48.4	6.84	48.0	7.37	477.4	63.50
	短期群	56.1	6.33	54.3	8.92	53.5	4.47	546.3	55.84
	長期群	57.3	4.69	55.0	6.59	53.0	6.34	550.7	46.90
	総和	50.9	8.01	50.9	7.59	50.0	7.22	505.5	67.74
女性	なし群	46.4	4.71	46.1	5.47	47.0	4.99	464.9	42.49
	短期群	51.4	4.33	49.4	4.42	50.8	3.33	505.0	28.05
	長期群	56.1	4.80	52.4	4.87	51.6	4.21	533.9	39.96
	総和	49.5	6.26	48.1	5.86	48.7	5.06	487.7	50.07
総和	なし群	46.5	5.35	46.6	5.90	47.2	5.66	467.9	48.57
	短期群	52.3	5.08	50.4	5.81	51.3	3.69	513.3	38.26
	長期群	56.4	4.77	53.1	5.46	52.0	4.86	538.4	42.31
	総和	49.8	6.74	48.8	6.42	49.0	5.68	492.1	55.33
性別の主効果 (df1=1, df2=309)		女性<男性 F=6.507, p<.05		女性<男性 F=11.803, p<.001		性差なし F=3.735, n. s.		女性<男性 F=9.853, p<.01	
海外生活期間の主効果 (df1=2, df2=309)		なし<短期<長期 F=91.282, p<.001		なし<短期<長期 F=31.174, p<.001		なし<短期=長期 F=22.812, p<.001		なし<短期<長期 F=60.482, p<.001	

4技能の自信についても海外生活経験の期間ごとに度数をまとめてみると、図3、図4が得られる。

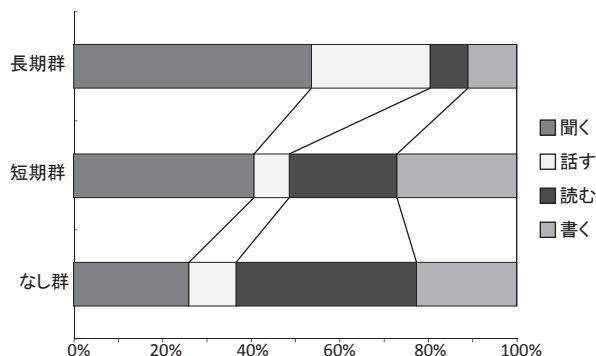


図3. 自信のある技能

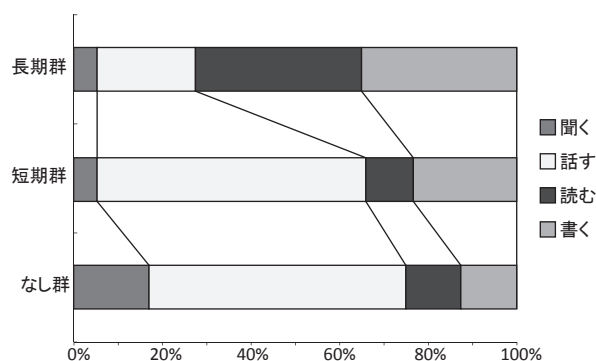


図4. 自信のない技能

自信がある技能（図1）については、群によって分布が異なり（ $\chi^2=49.508$ 、 $p<.001$ ）、海外生活経験が長いほど「聞く」に自信を持っている者が多く、ついで「話す」も同様に長期群の度数が多い。長期群は「聞く」「話す」で80%を占めており、会話によるコミュニケーションに自信を持っていると言えよう。自信がない技能（図2）についても群間で有意差があり（ $\chi^2=58.886$ 、 $p<.001$ ）、なし群と短期群の「話す」の多さが突出している。なし群は「聞く」も加えると70%が会話によるコミュニケーションに自信を持っておらず、短期群もそれに近い分布になっている。長期群は会話コミュニケーションに自信を持っている分、「読む」「書く」の比率が大きくなっている。

技能への自信と、実際のTOEFL得点との関係を見てみると、Listeningでは、「聞く」に自信を持っている者の平均は52.69（標準偏差6.41）、「話す」は52.24（7.16）、「読む」は46.54（5.83）、「書く」は48.34（5.53）となり、自信を持っている技能により得点は異なっ

ており ($F_{(3,305)}=19.988, p<.001$)、「聞く」「話す」に自信を持っている者は、「書く」「読む」に自信を持っている者よりも有意に得点が高かった。structure では、「聞く」は 49.71 (6.23)、「話す」は 49.16 (8.12)、「読む」は 47.32 (5.95)、「書く」は 49.05 (5.45) となり、自信を持っている技能によって得点は異なっていた。Reading でも、「聞く」は 49.39 (5.50)、「話す」は 48.93 (6.98)、「読む」は 48.68 (5.25)、「書く」は 48.85 (5.07) となり、どの技能に自信を持っていたとしても TOEFL 得点に有意差は認められなかった。Total では、「聞く」は 505.97 (53.77)、「話す」は 501.11 (69.68)、「読む」は 475.17 (49.01)、「書く」は 487.45 (44.39) となり、「聞く」に自信を持っている者は、「書く」「読む」に自信を持っている者よりも有意に得点が高かった ($F_{(3,305)}=6.185, p<.001$)。「読む」に自信を持っている者の得点がひとときわ低いとも言える。Listening と Total の得点に関し、発話コミュニケーションに自信を持っている者の方が、実際の英語得点も高いことが確認された。

2. ストラテジーの使用について

2-1. 基礎統計量

ストラテジーについては、各回答の「全く違う」を 1 点～「全くその通り」を 5 点と得点化した。測度としては、まず全 52 項目の評定値を求める。次に Oxford の主唱する記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジー、メタ認知ストラテジー、情意ストラテジー、社会的ストラテジーの 6 つの方略カテゴリーの得点を算出する。さらに木村・遠藤 (2010) では、同項目の因子分析により 7 つの学習方略因子を抽出しており、日本人の英語学習を説明するには Oxford のカテゴリーよりも適していると考えられるので、これらの 7 因子の尺度得点を求めた。なお、7 つの因子とは、「積極的に英語で会話を始める」「英語で質問する」「他の人と英語の練習をする」等の項目で因子負荷量が高い“英語を日常場面で使用する”第Ⅰ因子、「優れた英語学習者になるためにどうしたらよいか心掛ける」「スケジュールを立て英語の学習に十分時間をあてる」「英語の技能を高めるための明確な目標がある」で因子負荷量が高い“自覚的英語学習態度”の第Ⅱ因子、「間違いを恐れず英語を話すよう自分を励ます」「困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」「話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう」等で因子負荷量が高い“補償的態度”の第Ⅲ因子、「単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける」「単語が使われる場を心に描いて新語を覚える」で因子負荷量が高い“単語記憶”の第Ⅳ因子、「英語の中にパターンを見つけようとする」「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっているか気づく」「英語を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す」で因子負荷量が高い“神経質な英語学習態度”の第Ⅴ因子、「英語で読むのが楽しい」「できるだけ英語で読む機会を探す」で因子負

荷量が高い“能動的英語学習態度”の第Ⅵ因子、「英語を読むとき、一語一語調べない」「逐語訳はしないよう心掛ける」で負荷量が高い“概括的理解”の第Ⅶ因子である。また、木村・遠藤（2013）では、海外生活経験の長い者が最も使用する方略群と、最も使用しない方略群が識別された。そこで個人ごとに、前者に属する項目（「覚えやすいように文の中で新語を使う」「新語を身体で表現して覚える」「英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける」「知っている単語をいろいろな文脈で使う」「積極的に英語で会話を始める」「英語のラジオ・テレビ番組（NHK等）や英語の映画を見る」「英語で読み物を読むのが楽しい」「英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「逐語訳（一語一語訳す）はしないよう心掛ける」「読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」「英語を読むとき、一語一語辞書で調べない」「他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける」「英語で話しかけることのできる人を探そう心掛ける」「間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける」「他の人と英語を使う練習をよくする」「困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」「英語で質問をよくする」）の平均値を求め“能動的英語学習態度”得点、後者に属する項目（「授業の復習をよくする」「英語の発音練習をする」「英語の中にパターンを見つけようとする」「他の人が英語を使っているときは、集中して聞く」「優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける」「スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」「自分の英語学習の進歩について考える」「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく」「自分の英語学習において、音読は重要だと思う」「辞書をよく引く」「自分で考えた英語ノートを活用する」）の平均値を求め“勉強的英語学習態度”得点とした。この得点と TOEFL 得点との相関を求めたところ、“能動的英語学習態度”得点とすべての TOEFL 得点との間で有意な正の相関が得られ、“勉強的英語学習態度”得点とすべての TOEFL 得点との間で有意な負の相関が得られた。本研究でもこの2つの英語学習態度得点を算出し、測度に加えることとする（ただしこの名称は上記第Ⅵ因子の“能動的英語学習態度”と混同するので、以後“能動的英語使用態度”と表記し、“勉強的英語学習態度”も“勉強的態度”と表記する。また7因子の分析と区別して、“二極化した態度”として言及する）。

これらの測度についてそれぞれ平均評定値を求めた結果を表2に示す。

まず項目ごとの平均値を見ると、平均値が4.00を越えるものが9項目上げられる。「29. 英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う（4.51）」「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う（4.3）」「32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く（4.29）」「24. 知らない語を理解しようと推測する（4.26）」「43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかのむ（4.17）」「31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する（4.11）」「11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける（4.1）」「25. 英語での会話中、適切な語が思い浮かばない

いとき、ジェスチャーを使う (4.03)」「10. 新語は数回書いたり言ったりする (4.02)」で、このうち「31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する (4.11)」以外は[平均値+標準偏差]の値が5.00を越え天井効果が疑われる。平均値は4.00以下だが、「12. 英語の発音練習をする」「15. 英語のラジオ・テレビ番組 (NHK 等) や英語の映画を見る」も[平均値+標準偏差]の値が5.00以上になっており、高得点側に偏った分布をしている。とりわけ「英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う」や「自分の英語学習において、音読は重要だと思う」は中央値、最頻値がともに5で、分布の偏りが著しく、方略使用の個人差を記述するには不適当な項目である。使用方略の調査項目からは除外した方が望ましいだろう。一方平均値が2.5未満で著しく使用頻度の低いと思われる項目として「52. 自分で考えた英語ノートを活用する (2.49)」「7. 新語を身体で表現して覚える (2.36)」「26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る (2.27)」があげられる。これらの項目もまた方略使用の個人差を記述するには不適当な項目であるが、「英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る」は[平均値-標準偏差]の値が1.00を下回り、床効果も疑われる。

6つの方略カテゴリーの得点では、メタ認知ストラテジー (3.71)、補償ストラテジー (3.65)、認知ストラテジー (3.44)、情意ストラテジー (3.25)、社会ストラテジー (3.21)、記憶ストラテジー (3.05) となり、この順番は2011～2014年度で一貫している。相対的にはメタ認知や補償がよく使われており、情意、社会、記憶は中程度の使用に留まっている。

7因子の得点では、“概括的理解 (3.83)”、“自覚的英語学習態度 (3.60)”、“能動的英語学習態度 (3.60)”、“補償的態度 (3.31)”、“神経質な英語学習態度 (3.23)”、“単語記憶 (3.21)”、“英語を日常場面で使用する (3.09)”の順となった。英語学習に取り組む態度が重視されている様子がうかがえる。一方、“英語を日常場面で使用する”はほぼ中点程度の得点であった。

さらに二極化した態度では、“勉強的態度”が3.52、“能動的英語使用態度”が3.25となった。英語は使用するよりも勉強するものとして態度形成されているようである。

2-2. 海外生活経験とストラテジーの使用

各ストラテジーの評定値に関し、海外生活経験の期間 (なし群、短期群、長期群) ×性別 (男性、女性) の2要因分散分析を行ったところ (各平均値、標準偏差、 F 値は付表1に示す)、海外生活期間の主効果が52項目中21項目で認められた (昨年よりも項目数が少し増えている)。大別するならば海外生活経験のある者の方が多用する方略群と、逆に海外生活経験を持たない者の方が多用する方略群である。前者には、①長期群もしくは長期群と短期群の両群が、なし群よりも多く使用する項目として「11. 英語のネイティブ・スピーカーの

ように話すよう心掛ける」「13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う」「15. 英語のラジオ・テレビ番組（NHK等）や英語の映画を見る」「17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける」「30. いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける」「47. 英語で質問をよくする」「23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」「40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける」「14. 積極的に英語で会話を始める」の10項目があげられる。海外生活を経験している学生は、様々な生活の場面で積極的に英語を使用しているようである。後者には、②なし群が長期群よりも使用する項目としては「19. 英語の新語に似た語を日本語の中に探す」「34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」の2項目があげられる。またなし群と短期群が長期群よりも使用する項目として「20. 英語の中にパターンを見つけようとする」「21. 難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする。」があげられる。これらは、英語を使用するのではなく、英語を学習の対象としている態度がうかがえる。やや特殊な傾向として、③短期群の使用程度が最も高い項目に「2. 覚えやすいように文の中で新語を使う」「38. 自分の英語学習の進歩について考える」「44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう」「49. 特定の日本人の英語の熟達者を意識している」「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う」の5項目があげられる。いずれもなし群と長期群の間に差はない。短期経験者であればこそ使用する過渡的な学習方略の可能性がある。

Oxfordのカテゴリーでは認知ストラテジー、社会ストラテジー、補償ストラテジーで、海外生活期間のある者の方が多く使用するという結果が得られた。7つの因子得点では、“英語を日常場面で使用する”で海外生活期間の主効果が認められ、なし群<短期群=長期群という得点差が検出された。当然のことながら、海外生活経験者は英語を生活の中で使用しているわけである。一方、“神経質な英語学習態度”では長期群=なし群<短期群という差が認められた。短期群が最も神経質になっているということである。

二極化した態度では、“能動的英語使用態度”ではなし群<短期群=長期群という差が、“勉強的態度”では長期群<なし群=短期群という差が検出された。上記で示された、海外生活経験の長い者は英語を使用し、海外生活経験を持たない者は英語を勉強する、という態度の違いがより明確に示されている。

表 2.SILL の回答結果

項目	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	歪度	尖度
1. 英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える。	3.55	1.08	4	3	-.38	-.28
2. 覚えやすいように文の中で新語を使う。	3.23	1.11	3	3	-.09	-.68
3. 単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける。	3.56	1.24	4	4	-.57	-.70
4. 単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える。	3.44	1.23	4	4	-.48	-.67
5. 新語を覚えるときには韻を使う。	2.63	1.30	2	2	.31	-.98
6. 新語を覚えるときに単語カードなどを使う。	2.56	1.47	2	1	.44	-1.24
7. 新語を身体で表現して覚える。	2.36	1.32	2	1	.60	-.80
8. 授業の復習をよくする。	3.04	1.07	3	3	-.10	-.42
9. 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく。	3.10	1.28	3	4	-.20	-1.04
10. 新語は数回書いたり言ったりする。	4.02	1.15	4	5	-1.07	.28
11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話そう心掛ける。	4.10	1.03	4	5	-1.04	.46
12. 英語の発音練習をする。	3.79	1.23	4	5	-.82	-.26
13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う。	3.53	1.07	4	4	-.39	-.41
14. 積極的に英語で会話を始める。	3.23	1.19	3	3	-.01	-.97
15. 英語のラジオ・テレビ番組（NHK 等）や英語の映画を見る。	3.84	1.28	4	5	-.79	-.56
16. 英語で読み物を読むのが楽しい。	3.57	1.14	4	4	-.37	-.77
17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く。	3.06	1.38	3	2	-.04	-1.25
18. 英語を読むとき、まずスキミング（通し読み）をしてから再び前に戻って注意深く読む。	2.98	1.29	3	3	.04	-1.08
19. 英語の新語に似た語を日本語の中に探す。	2.57	1.25	3	1	.23	-1.03
20. 英語の中にパターンを見つけようとする。	3.38	1.25	4	4	-.42	-.82
22. 難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする。	3.61	1.18	4	4	-.65	-.33
22. 逐語訳（一語一語訳す）はしないよう心掛ける。	3.84	1.09	4	5	-.68	-.26
23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する。	2.67	1.17	3	3	.41	-.53
24. 知らない語を理解しようと推測する。	4.26	0.81	4	5	-1.05	1.37
25. 英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う。	4.03	1.11	4	5	-1.08	.56
26. 英語で適切な語が分らないとき、自分で新語を作る。	2.27	1.28	2	1	.72	-.64
27. 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない。	3.81	1.12	4	5	-.69	-.38
28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しよう心掛ける。	3.03	1.25	3	3	.00	-.98
29. 英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う。	4.51	0.72	5	5	-1.68	3.59
30. いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける。	3.55	1.09	4	3	-.28	-.68
31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する。	4.11	0.85	4	4	-.74	.07
32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く。	4.29	0.82	4	5	-1.18	1.40
33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける。	3.81	1.05	4	5	-.52	-.45
34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる。	3.15	1.12	3	3	-.13	-.67
35. 英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける。	3.31	1.24	3	3	-.14	-1.02
36. できるだけ英語で読む機会を探す。	3.64	1.08	4	4	-.46	-.48
37. 英語の技能を高めるための明確な目標を持っている。	3.66	1.20	4	5	-.49	-.80
38. 自分の英語学習の進歩について考える。	3.84	1.04	4	4	-.68	-.21
39. 英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける。	3.10	1.20	3	3	-.08	-.81
40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける。	3.43	1.22	4	4	-.36	-.79
41. うまくいったとき、自分をほめる。	3.39	1.25	3	3	-.29	-.87
42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく。	3.09	1.31	3	3	-.06	-1.07
43. 英語が分らないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらうかたのむ。	4.17	1.00	4	5	-1.09	.41
44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう。	3.21	1.29	3	3	-.15	-1.04
45. 他の人と英語を使う練習をよくする。	2.54	1.20	2	2	.46	-.61
46. 困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める。	3.05	1.31	3	3	-.02	-1.09
47. 英語で質問をよくする。	2.62	1.17	2	2	.39	-.64
48. 英語話者の文化を学ぶよう心掛ける。	3.65	1.19	4	5	-.58	-.52
49. 特定の日本人の英語の熟達者を意識している。	3.08	1.38	3	3	.01	-1.21
50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う。	4.30	1.02	5	5	-1.49	1.62
51. 辞書をよく引く。	3.58	1.15	4	3	-.48	-.49
52. 自分で考えた英語ノートを活用する。	2.49	1.33	2	1	.56	-.82
記憶ストラテジー	3.05	0.62	3.11	3.00	-.43	.50
認知ストラテジー	3.44	0.58	3.43	3.43	-.25	.41
補償ストラテジー	3.65	0.55	3.67	3.50	.00	-.08
メタ認知ストラテジー	3.71	0.70	3.67	3.78	-.13	-.55
情意ストラテジー	3.25	0.77	3.25	3.50	-.17	.10
社会ストラテジー	3.21	0.83	3.17	3.33	-.14	-.32
英語を日常場面で使用する	3.09	0.74	3.10	2.80	-.02	-.46
自覚的英語学習態度	3.60	0.71	3.63	3.88	-.16	-.45
補償的態度	3.31	0.87	3.25	3.50	-.17	-.55
単語記憶	3.21	0.93	3.33	3.00	-.39	-.24
神経質な英語学習態度	3.23	0.86	3.33	3.00	-.11	-.14
能動的英語学習態度	3.60	0.96	3.50	3.50	-.36	-.48
概括的理解	3.83	0.87	4.00	4.00	-.36	-.47
能動的英語使用態度	3.25	0.65	3.29	3.29	-.02	-.38
勉強的態度	3.52	0.64	3.55	3.73	-.37	.09

性別の主効果はいくつかの項目で検出された。「5. 新語を覚えるときには韻を使う」「6. 新語を覚えるときに単語カードなどを使う」「8. 授業の復習をよくする」「9. 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく」「22. 逐語訳（一語一語訳す）はしないよう心掛ける」「25. 英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う」「33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける」「41. うまくいったとき、自分をほめる」「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う」「51. 辞書をよく引く」「52. 自分で考えた英語ノートを活用する」の11項目では女性の方が男性より使用していた。男性の方が多用していたのは「40. 間違いを恐れずに英語を話そう心掛ける」の1項目のみであった。カテゴリーでは記憶ストラテジーで、二極化した態度では“勉強的態度”で女性の方が男性より使用していた。女性の方が、記憶術に頼って勉強している様子がうかがえ、そのことが女性の英語得点を低くしている要因かもしれない。

2-3. ストラテジーの使用と英語学力

方略の使用がTOEFLの得点を予測しうるかを重回帰分析（ステップワイズ法）によって検討した。カテゴリー、7つの因子、二極化した態度ごとに方略使用の得点を説明変数、英語得点Listening得点、Structure得点、Reading得点、Total得点のそれぞれを従属変数とした。

まず6カテゴリーの得点を説明変数とした場合、Listeningを目的変数とすると、認知、記憶、メタ認知の得点を説明変数として投入したモデルで、 $R=.392$ ($R^2=.153$)、 $p<.001$ となった。標準化 β 係数は認知 (.530)、記憶 (-.152)、メタ認知 (-.272) で、認知の β 係数は正だが、メタ認知と記憶は負になっている。Structureを目的変数とした場合は、認知と情意を説明変数としたモデルで有意な重相関係数が得られた ($R=.321$ 、 $R^2=.103$ 、 $p<.001$)。ただし、決定係数はかなり小さい。標準化 β 係数は認知 (.339)、情意 (-.209) で、ここでも β 係数は認知で小さいながらも正となっている。Readingを目的変数とした場合では、認知を説明変数としたモデルが得られたが、これも決定係数は極めて小さい ($R=.288$ 、 $R^2=.083$ 、 $p<.001$)。標準化 β 係数は認知 (.288) で、これも β 係数は正である。Totalを目的変数とした場合、認知、メタ認知、情意を説明変数としたモデルが有意であった ($R=.379$ 、 $R^2=.143$ 、 $p<.001$)。標準化 β 係数は認知 (.482)、メタ認知 (-.182)、情意 (-.127) となった。すべて認知のみで正の β 係数が得られている。認知ストラテジーを多用するほど、英語得点が高いと予想されることになる。

7つの因子得点を説明変数とした分析では、Listeningを目的変数とすると、“英語を日常場面で使用する”、“自覚的英語学習態度”、“神経質な英語学習態度”、“概括的理解”の得点を説明変数として投入したモデルで、 $R=.544$ ($R^2=.296$)、 $p<.001$ となった。標準化 β 係数は“英語を日常場面で使用する” (.568)、“自覚的英語学習態度” (-.319)、“神経質な英

語学習態度 (−.141)”、“概括的理解 (.146)”で、“英語を日常場面で使用する”と“概括的理解”の β 係数は正だが、“自覚的英語学習態度”と“神経質な英語学習態度”は負になっている。Structure を目的変数とした場合は、“英語を日常場面で使用する”、“補償的態度”、“神経質な英語学習態度”を説明変数としたモデルで有意な重相関係数が得られた ($R=.517$, $R^2=.267$, $p<.001$)。標準化 β 係数は“英語を日常場面で使用する (.641)”、“補償的態度 (−.311)”、“神経質な英語学習態度 (−.142)”であった。Reading を目的変数とした場合では、“英語を日常場面で使用する”、“補償的態度”、“能動的英語学習態度”、“単語記憶”を説明変数としたモデルが得られた ($R=.400$, $R^2=.160$, $p<.001$)。標準化 β 係数は“英語を日常場面で使用する (.373)”、“補償的態度 (−.250)”、“能動的英語学習態度 (.152)”、“単語記憶 (.114)”であった。Total を目的変数とした場合、“英語を日常場面で使用する”、“補償的態度”、“自覚的英語学習態度”、“能動的英語学習態度”、“概括的理解”を説明変数としたモデルが有意であった ($R=.544$, $R^2=.296$, $p<.001$)。標準化 β 係数は“英語を日常場面で使用する (.605)”、“補償的態度 (−.220)”、“自覚的英語学習態度 (−.278)”、“能動的英語学習態度 (.162)”、“概括的理解 (.123)”となった。総合すると、「積極的に英語で会話を始める」「英語で質問する」「他の人と英語の練習をする」等の“英語を日常で使用する”の得点が高いほど TOEFL の得点は高いと予想される。

二極化された態度では、Listening を目的変数とした場合、 $R=.532$, $R^2=.283$, $p<.001$ となり、“能動的英語使用態度”の標準化 β 係数は .524、“勉強的態度”の標準化 β 係数は −.370 となった。Structure を目的変数とした場合は、 $R=.444$, $R^2=.197$, $p<.001$ 、“能動的英語使用態度 ($\beta =.448$)”、“勉強的態度 ($\beta =-.284$)”、Reading を目的変数とした場合では、 $R=.296$, $R^2=.087$, $p<.001$ 、“能動的英語使用態度 ($\beta =.296$)”のみを投入したモデルが有意であった。Total を目的変数とした場合、 $R=.483$, $R^2=.233$, $p<.001$ 、“能動的英語学習態度 ($\beta =.495$)”、“勉強的態度 ($\beta =-.284$)”となった。すべて“能動的英語使用態度”は正、Reading 以外で“勉強的態度”は負の β 係数が得られた。ここでも、英語を“使用”しようとするほど英語得点は高くなると予想され、“勉強”しようとするほど逆説的に英語得点は下がると予測される。

決定係数の数値をみると、説明変数としては、Oxford の 6 カテゴリー得点よりは、7 つの因子得点や二極化された態度得点の方が予測力があると思われる。

2-4. 自信のある技能と方略使用

どの技能に自信を持っているかによって、使用する方略に違いがあるかを検討したところ、Oxford のカテゴリーに関しては、方略の主効果はどのカテゴリーにおいても有意ではなかった。

7 つの因子では、“英語を日常場面で使用する”の因子で主効果が認められた。方略使用

の平均値は、「聞く」3.15（標準偏差 .67）、「話す」は3.40（.77）、「読む」は2.86（.76）、「書く」は3.07（.70）となり、「話す」に自信を持っている者は、「書く」「読む」に自信を持っている者よりも有意に“英語を日常場面で使用する”得点が高かった（ $F_{(3, 305)}=5.454$ 、 $p<.001$ ）。

二極化された態度では、“能動的英語使用態度”において、「聞く」に自信を持っている者の平均は3.33（標準偏差 .61）、「話す」は3.49（.68）、「読む」は3.06（.67）、「書く」は3.19（.62）となり、自信を持っている技能により得点は異なっていた（ $F_{(3, 305)}=5.639$ 、 $p<.001$ ）。“英語を日常場面で使用する”と同様に「話す」に自信を持っている者は、「書く」「読む」に自信を持っている者よりも有意に“能動的英語使用態度”が高かった。

3. 英語学習効力感（CAN-DO）について

3-1. 海外生活経験と CAN-DO

CAN-DO の設問に対する回答の「全く違う」を1点～「全くその通り」を5点と得点化し、各項目の平均値を求めた（基礎統計量を表3に示す）。4.00を越える項目は皆無で、効力感が高いとは言えない。3.50以上の項目を拾うと、「56. 公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる（3.89）」「57. 交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる（3.79）」「86. 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる（3.70）」「88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる（3.68）」「87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる（3.64）」「53. 興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる（3.59）」「84. 興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる（3.56）」「63. いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる（3.51）」などがあげられる。Listening 準1級（3.55）とWriting 準1級（3.52）が3.50以上で、簡単なものであれば聞くことと書くことはできるという自覚である。一方、2.50に満たないような極端に得点の低い項目もみあたらない。全項目を平均すると3.17となる。全般的には「ふつう」よりすこし出来ると自己評価しているのであろう。

各得点を従属変数として、海外生活経験の期間（なし群、短期群、長期群）×性別（男性、女性）の2要因分散分析を行った（各平均値、標準偏差、 F 値を付表2に示す）。海外生活期間の主効果は42項目すべてで認められた。Tukeyの多重比較の結果、なし群＜短期群＜長期群という有意差が“聞く”と“話す”に関わる15項目で、なし群＜短期群＝長期群という有意差が“読む”と“書く”に関わる16項目で、なし群＝短期群＜長期群という有意差が“話す”に関わる3項目で、なし群＜長期群という有意差が“読む”と“書く”

に関わる8項目で有意差が検出された。なし群<長期群という差は一貫して見られている。各項目をListening 準1級レベル、Listening 1級レベル、Listening Totalと技能とレベルでまとめて得点化した結果では、Listening 1級、Listening Total、Listening 準1級、Speaking 1級、Speaking Total、Speaking 準1級では、なし群<短期群<長期群という有意差が認められ、Reading 1級、Reading Total、Reading 準1級、Writing 1級、Writing Total、Writing 準1級では、なし群<短期群=長期群という有意差が認められている。“聞く”と“話す”に関しては、単に海外生活経験の有無だけではなく、その期間の長さも関連しているのに対し、“読む”と“書く”に関しては、海外生活経験の有無によって効力感が異なっているのは興味深い結果である。

性別の主効果については、「55. 観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる」「59. 幅広い話題に関するまとまりのある話を理解することができる」「60. 社会的な話題に関する話を理解することができる」「62. テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる」「65. 自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる」「66. 商品やサービスについて、苦情を言うことができる」「68. 病院などで健康状態を伝えることができる」「71. 社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる」「77. まとまった量の英文の要点を理解することができる」「79. 商品の取り扱い説明書を理解することができる」「80. 雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる」「82. 資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる」「83. 留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することができる」の13項目で有意となった。レベルでは、Listening 1級、Reading 1級、Reading Total、Reading 準1級、Speaking 1級、Speaking Totalで性差が見られた。すべて、男性の方が女性よりも効力感が高いという結果である。昨年は性差は全く検出されなかったのに対して、今回の結果では女性の効力感がやや低くなっている。

表 3.CAN-DO の基礎統計量

項目	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	歪度	尖度
53. 興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(講演、講義など)	3.59	1.16	4	4	-.37	-.82
54. テレビラジオのニュース番組を聞いて、その要点を理解することができる。	3.46	1.10	3	3	-.28	-.62
55. 観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる。	3.48	1.12	4	3	-.33	-.57
56. 公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる。	3.89	1.02	4	5	-.65	-.13
57. 交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる。	3.79	1.06	4	4	-.59	-.31
58. 自分の仕事や専門分野の内容であれば、電話で注文や問合せを聞いて、理解することができる。	3.08	1.21	3	3	-.06	-.82
59. 幅広い話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(一般教養的な講演や講義など)	3.08	1.11	3	3	.08	-.59
60. 社会的な話題に関する話を理解することができる。(環境問題に関する講演など)	3.01	1.16	3	3	.10	-.72
61. 会議に参加して、その内容を理解することができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	2.88	1.20	3	3	.07	-.88
62. テレビラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる。	2.90	1.11	3	3	.25	-.57
63. いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる。	3.51	1.12	4	4	-.33	-.76
64. 調べたことについて、まとまりのある話をするができる。(課題の発表、プレゼンテーション)	2.92	1.13	3	3	.08	-.74
65. 自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	2.83	1.16	3	2	.22	-.76
66. 商品やサービスについて、苦情を言うことができる。(商品の故障、サービスの内容など)	2.74	1.28	3	2	.33	-.90
67. 公共の施設で簡単な用を足すことができる。(外国の郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど)	3.43	1.28	3	3	-.36	-.86
68. 病院などで健康状態を伝えることができる。	3.32	1.20	3	3	-.18	-.88
69. 簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる。(歯医者や美容院の予約など)	3.42	1.27	3	5	-.29	-1.00
70. 読んだ本や見た映画について、そのあらすじを述べるができる。	3.14	1.27	3	3	-.10	-1.00
71. 社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	2.71	1.21	3	2	.35	-.73
72. 会議に参加してやりとりをすることができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	2.61	1.20	3	2	.42	-.63
73. 幅広い内容について、電話で交渉することができる。(予定の変更、値段の交渉など)	2.61	1.28	2	2	.40	-.88
74. 相手や状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けすることができる。	2.94	1.33	3	2	.09	-1.15
75. 英文の種類や読む目的に応じて、適切に読みこなすことができる。(新聞をさっと読む、評論文を注意深く読む、小説を楽しむながら読む)	3.23	1.09	3	3	-.13	-.54
76. 英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる。(The Japan Times/The Daily Yomiuri/The New York Times など)	3.05	1.15	3	3	-.04	-.75
77. まとまった量の英文の要点を理解することができる。(講義や研修での課題図書や資料など)	3.06	1.11	3	3	-.03	-.68
78. 仕事に関する手紙 (Eメール) を理解することができる。	3.33	1.13	3	3	-.14	-.70
79. 商品の取り扱い説明書を理解することができる。(電化製品など)	3.38	1.13	3	3	-.23	-.72
80. 雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる。(TIME/Newsweek など)	3.12	1.07	3	3	.08	-.64
81. 文学作品を理解することができる。(小説など)	3.13	1.13	3	3	-.07	-.71
82. 資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる。(報告書、統計的な資料など)	2.96	1.11	3	3	.14	-.68
83. 留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することができる。	2.99	1.19	3	3	.16	-.77
84. 興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる。(簡単なレシピ、器具の使い方など)	3.56	1.11	4	4	-.27	-.87
85. 興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要約を書くことができる。(講義の内容、雑誌や新聞の記事など)	3.34	1.10	3	3	-.06	-.74
86. 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる。	3.70	1.04	4	4	-.42	-.44
87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食べ物、祝日、お祭りなど)	3.64	1.01	4	4	-.36	-.44
88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる。(留学の志望動機など)	3.68	1.03	4	4	-.36	-.64
89. 自分の専門分野の内容であれば、注文や問合せに対して簡単な返事を書くことができる。	3.21	1.10	3	3	.00	-.72
90. 社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる。(環境問題など)	3.06	1.08	3	3	.14	-.66
91. 自分の行なった調査について、まとまりのある文章を書くことができる。(レポート、報告書など)	3.03	1.08	3	3	.05	-.67
92. 商品やサービスについて、苦情を申し立てる文章を書くことができる。(商品の故障、サービス内容など)	2.78	1.08	3	3	.25	-.44
93. 社会的な話題に関する雑誌記事や新聞記事の要約を書くことができる。(社説や論文など)	2.74	1.07	3	3	.28	-.44
94. 講義や会議の要点のメモをとることができる。	3.00	1.09	3	3	.13	-.62
Listening 準1級	3.55	0.94	3.50	5.00	-.22	-.59
Listening 1級	3.07	1.00	3.00	3.00	.09	-.62
Listening Total	3.33	0.92	3.27	3.55	-.05	-.57
Speaking 準1級	3.11	1.03	3.00	2.57	-.06	-.69
Speaking 1級	2.72	1.12	2.50	2.00	.35	-.70
Speaking Total	2.97	1.03	3.00	2.27	.13	-.67
Reading 準1級	3.21	0.95	3.20	3.00	.05	-.49
Reading 1級	3.05	0.96	3.00	3.00	.21	-.52
Reading Total	3.14	0.92	3.11	2.89	.17	-.41
Writing 準1級	3.52	0.91	3.50	5.00	-.20	-.43
Writing 1級	2.92	0.92	2.80	2.80	.23	-.20
Writing Total	3.25	0.87	3.18	3.27	.02	-.28

3-2.CAN-DO と英語学力

技能とレベルごとの得点を説明変数、TOEFL-ITP の Listening 得点、Structure 得点、Reading 得点、Total 得点を従属変数としてステップワイズによる重回帰分析を行った。その結果、Listening では $R=.609$ 、 $R^2=.371$ 、 $p<.001$ で、説明変数として Listening Total (標準化 β 係数 = .283)、Speaking 準 1 級 (.249)、Reading 準 1 級 (.136) を投入したモデルが有意であった。Structure では説明変数として Reading Total (.167)、Writing 1 級 (.227)、Listening Total (.217) を投入したモデルが $R=.556$ 、 $R^2=.309$ 、 $p<.001$ で有意であった。Reading でも $R=.517$ 、 $R^2=.267$ 、 $p<.001$ で、有意なモデルが検出され、モデル式に投入された説明変数は Reading 準 1 級 (.365) と Listening Total (.184) であった。Total では説明変数として Listening Total (.243)、Reading 準 1 級 (.278)、Speaking 準 1 級 (.176) を投入したモデルが $R=.631$ 、 $R^2=.398$ 、 $p<.001$ で、有意であった。決定係数は .30 ~ .40 程度の範囲に収まり、昨年よりは予測力はやや増している。偏回帰係数はすべて正で、効力感が高いほど英語得点が高いことを予測する。モデル式に投入された説明変数を検討すると、4つのモデル式すべてに Listening Total が投入されていた。Listening が重要な説明変数であるのは一昨年と同様の傾向である。また Reading 準 1 級も3つのモデル式に投入され、あとの1つにも Reading Total が投入されていた。Reading 効力感が説明変数として組み込まれたのは昨年と同様の結果である。英語ができるという実感は“英語が聞き取れる”こと、次いで“英語が読める”ことから得られていると考えられる。言い換えるならば、他者の発した英語による情報を解説できるほど、英語ができると自認していることになる。一方、Writing に関する効力感は、説明変数としてはあまり組み込まれていない。英語（英文）で自己表現できるかどうかは、英語ができると感じられる基準にはなっていないようである。

3-3. 自信のある技能と CAN-DO

どの技能に自信を持っているかによって、効力感に違いがあるかを検討したところ、表4のような結果が得られた。reading では1級でしか有意差は得られなかったが、他ではすべて自信を持っている技能により効力感が異なるという結果となった。概括するならば、「読む」に自信を持っている者の効力感は低く、「話す」に自信を持っている者の効力感は一貫して高い。英語ができるという実感は、一方向の“翻訳”ではなく、双方向の“伝達”が可能かどうかによっていると考えられる。

表 4. 自信のある技能と CAN-DO の平均値

CAN-DO	自信のある技能				F (3,305)		多重比較
	聞く	話す	読む	書く			
Listening 準 1 級	3.81 (0.76)	3.91 (1.09)	3.24 (0.90)	3.26 (0.88)	11.68	p<.001	読む=書く<聞く=話す
Listening 1 級	3.30 (0.93)	3.50 (1.11)	2.84 (0.92)	2.70 (0.90)	10.07	p<.001	読む=書く<聞く=話す
Listening Total	3.58 (0.78)	3.73 (1.07)	3.06 (0.86)	3.01 (0.85)	11.94	p<.001	読む=書く<聞く=話す
Speaking 準 1 級	3.25 (0.95)	3.74 (1.06)	2.72 (1.00)	2.99 (0.96)	12.11	p<.001	読む<聞く<話す
Speaking 1 級	2.76 (1.06)	3.54 (1.21)	2.43 (1.01)	2.49 (1.03)	12.51	p<.001	読む=書く=聞く<話す
Speaking Total	3.07 (0.95)	3.67 (1.10)	2.61 (0.97)	2.80 (0.95)	12.84	p<.001	読む<聞く<話す
Reading 準 1 級	3.23 (0.90)	3.43 (1.13)	3.16 (0.93)	3.07 (0.88)	1.38		
Reading 1 級	3.10 (0.91)	3.41 (1.10)	2.90 (0.94)	2.87 (0.88)	3.88	p<.01	書く=読む<話す
Reading Total	3.17 (0.85)	3.42 (1.11)	3.04 (0.90)	2.98 (0.84)	2.49		
Writing 準 1 級	3.52 (0.84)	3.83 (1.00)	3.16 (0.90)	3.74 (0.79)	8.27	p<.001	読む<聞く=書く=話す
Writing 1 級	2.87 (0.83)	3.28 (1.08)	2.71 (0.90)	3.02 (0.92)	4.35	p<.01	読む=聞く<話す
Writing Total	3.23 (0.78)	3.58 (1.00)	2.96 (0.87)	3.41 (0.80)	6.71	p<.001	読む<書く=話す

括弧内の数値は標準偏差

VI. 課題と提案

以下の課題及び提案の内容は、青山学院大学文学部『紀要』第 55 号（2013）及び『紀要』第 56 号（2014）において記述した内容と重複する部分があることを初めに記しておきたい。

1. 入学時より英語学力において高い成績を出していながら伸び悩んでいる上位グループに属する学生（長期海外生活体験者等：男性；550.7（前年比：+ 6.8）、女性；533.9（前年比：+ 0.1））には、国際レベルにおいて言語能力をさらに向上できるようなカリキュラムの開発、専門領域との連動（文学、語学、言語教育、コミュニケーション）や英語を共通語として成り立つ専門科目群の創設等総じて「内容言語統合型授業：CLIL=Content and Language Integrated Learning」が可能となる言語教育環境が必要になるであろう。EGP（=English for General Purposes）教育から脱却し、ESP（=English for Specific/Special Purposes）、さらには、EAP（=English for Academic Purposes）教育へ転換していくことが今後のさらなる課題となるであろう。因みに、総和の平均は 492.1（前年比：+ 2.4）は、同時期に TOEFL（ITP）を実施した全国の大学（国立・公立・私立）の中で第 15 位の成績であった。大学 1 年初頭で平均 500 点以上の大学は全国で 10 校に満たないが、共通特徴は「グローバル化推進校」として国に認められた大学であるという点である。我が英米文学科の学生の大半はその資質と潜在的能力において「グローバル化推進校」の学生と比して勝るとも劣らぬ学習者群であり、彼らの能力が伸び悩んでいるとしたら、学習者要因以上に言語教育環境に問題があり、改善の余地があるということになるだろう。将来構想委員会と英語科目検討委員会により提案された英語で行われる

科目群を履修することで卒業要件単位を満たす案（EMI化）の実効性に期待をかけたい。

2. 1. と同様に、英語習得そのものに自信が持てない（自己効力感が低い）下位グループに属する学生には、その原因の特定を本研究調査の結果を生かして明らかにし、その上で問題解決に繋がる本目細かい学習支援を系統的且つ経年的に行う必要性があろう。因みに2016年度入学を許可する学生集団の内、指定校推薦、内部進学推薦等による推薦学生群には、合格発表の後、入学までの4カ月を活用した「入学前英語学習指導」としてTOEFLの問題集（2冊）の指定と英語学習計画の提出を求める予定である。2016年度のPretestにおいて、これら一連の「入学前英語学習指導」の成果が表れることを切に望むところである。また本研究調査の結果（3-3. 自信のある技能とCAN-DO）として、「読む」に自信を持っている者の自己効力感は概して低く、「話す」に自信を持っている者の自己効力感は一貫して高く、英語ができるという実感は、一方向の「翻訳」ではなく、双方向の「伝達」が可能かどうかによっていることが明らかになっている。「伝達」の中に4技能の統合教育と異文化間理解教育が可能となる言語教育環境の構築が必要になるであろう。
3. 大学における英語教育プログラムの中に、レベル別に基礎訓練を終えた学生を一定期間（6か月以上）英語使用国（英米加豪のみならずアジア諸国も含む）に留学させ、英語運用能力のみならず、第5の能力と言われるグローバル化に対応する「異文化間能力」（Intercultural Competence）を育成し、「文化相対主義」（Culture Relativism: 文化に優劣はないという普遍思想）への意識を高められるような本来的な外国語教育システムの構築を真剣に且つ緊急に検討すべき時期に入っていると考える。大学全体がグローバル化に対応し、セメスター制導入の実行を目前に控えた今こそ、外国の提携大学との単位の互換（Unit Credit System）を視野に入れた、英米文学科の学生に相応しい留学教育システムの検討が望まれるところである。（滞在期間を6ヶ月以上とした理由は、それ以下の場合、モチベーションの高揚には繋がっても、実際の英語力やコミュニケーション能力の向上は概して変わらないという報告が多いためである。海外生活体験がない場合、環境に慣れるのに3か月、耳が機能し自らが話すようになり、4技能が統合するようになるのに3か月、合計6か月は必要となるはずである。筆者（木村）は東京都教育委員会の「現職英語教員海外派遣事業」の外部評価委員であるが、既に一定水準以上の英語運用能力を有し、研究テーマを持った上で留学する現職英語教員の場合、滞在期間が仮に短期（3か月）であっても十分な成績を出す傾向が認められている。たとえ短期間であっても現職英語教員が海外留学を体験し、技能と意識の向上を果たした場合の教育的効果は大きいことを付言しておきたい。）
4. 大学教養課程（1-2年次）及び専門課程における英語教育の到達度を「指標」として、EUのCEFR（Common European Framework for Reference of Languages: Learning、

Teaching, Assessment) や日本の教育環境を考慮して策定された CEFR- J 等を参考に、準備する必要がある。「グローバル 30」に選ばれた大学の言語政策を分析すると、(1) CEFR 等を参考にした到達度を意識している、(2) 独自の英語カリキュラムを評価する時に国際版の英語テストを採用している、ことが明らかになっている。CEFR 等を「指標」として位置付けた場合、上記 1、2、3 はその全体枠の中で処理することになる。CEFR の中核理念は、複言語主義 (plurilingualism)・複文化主義 (pluriculturalism) 及び行動中心主義にあると言われる。行動中心主義は、言語能力を単なる言語知識としてではなく、特定の場面でどのような課題に対処できるかで言語能力を判断する立場で示す。CEFR は、言語教育政策全般を包括的に論じているが、とりわけ世界的に注目を集めているのは、言語熟達度を測定するための共通参照レベル (Common Reference Levels) である。国際化あるいはグローバル化を正面から議論するのであれば、今そしてこれから行う言語教育を国際的に通用するレベルで評価する「指標」を持った上で行うべきであろう。本研究で用いている日本英語検定協会の CAN-DO Lists も基本的には CEFR にその基本理念を置いて作成されている。以下は「共通参照レベル：全体的な尺度」(吉島・大橋、2004) からの抜粋である。英米文の学生には、教養課程 (1 - 2 年次) で B2 を、専門課程 (3 - 4 年次) で C1 を、B 方式等で入学する高度な英語運用能力を有する学生には C2 に至る教育環境を保証してやりたいと思う。

「共通参照レベル：全体的な尺度」

* 熟達した言語使用者 (レベル：C2-C1)

C2: 聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現でき、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。

C1: いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現の用法をマスターしていることが伺える。

* 自立した言語使用者 (レベル：B2-B1)

B2: 自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで母語話者とやりとりができるくらい流暢かつ自然である。かなり広範な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。

B1：仕事、学校、娯楽で普段で会うような身近な話題について、標準的な話し方があれば主要点を理解できる。そのことばが話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。

＊基礎段階の言語使用者（レベル：A2-A1）

A2：ごく基本的な個人情報や家庭事情、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。

A1：具体的な要求を満足させるための、よく使われるに日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合い、持ち物などの個人情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け舟を出してくれるなら簡単なやりとりをすることができる。

5.2015年度大学入試で最も社会的関心が集中したのは上智大学と日本英語検定協会が開発した4技能の測定を可能にすると言われるTEAP (Test of English for Academic Purposes) の出現であった。学習指導要領に謳われるコミュニケーション能力は、4技能の統合によってその育成が可能とされる。然るに、その教育効果を測定する機能と役割を果たすべき現行のセンター入試はListeningとReadingの2技能のみをその測定対象とし、SpeakingとWritingを測定対象としていないため、廃止になるという。TEAPの受験は初年度9000名を超えた。2016年度は進学指導要領（4技能の統合）下で教育を受けた高校生を大学が受け入れる年度にあたる。各大学・学部・学科は、新学習指導要領移行後の成果の検証を自らの入試制度をもって行わなければならない。そこで学科内で検討した結果、新たにC方式を立ち上げ、TEAP受験を開始することとなった。TEAPを意識し利用する高校は、4技能の統合を目指した英語教育を行ってきた傾向が強い上位校である可能性が高い。また個人レベルでTEAPを利用しようとする受験者は英語の運用に関心と自信を持っている可能性が高い。本研究でも明らかのように、「話す」「聞く」に自信を持っている学習者の自己効力感は一貫して高い。2015年5月に上智大学で開催された「TEAP連絡協議会」において文部科学省高等教育局の審議官に筆者（提案者）が直接質問したところ、審議官は「国も4技能測定を可能とするテストの開発を開始した」という回答をされた。恐らくこれ（新型テスト）がセンター試験に代る新テストになる可能性が高いと直感した。以下は2020年（東京オリンピック開催）までの英語教育の主な流れを現時点で通時的に整理したものである。

2016 年：学習指導要領が改訂される。文部科学省により、英語を含む小中高の各科目の新たな目標及び授業内容が提示される。新しい教科書は 2017 年から作成される予定。（教育成果は 2020 年の入試）

2018 年：英語教育改革案を段階的に実施する。指導体制を整備しつつ、自治体によっては先行実施も可能となる。小学校 5 年生・6 年生の「教科化」に伴い、段階評価が導入される可能性あり。

但し、週 3 時間の確保は現状では難しいとの観測が大勢を占めている。

2019 年：センター試験は廃止され、新試験に移行される。大学入試からセンター試験がなくなり、「大学入学者希望学力評価テスト（仮称）」が導入される予定。これにより英語の入試体制も大きく変わる可能性が出てくる。

2020 年：英語教育改革案を完全実施する。大学入試、大きく変化する。小学校 3 年生、4 年生の英語が全面的に必修となる。中高の英語の授業は英語で行う（TEE：Teach English in English）ことが基本となる。この年から、大学入試の英語は 4 技能が要求されることになる。

以上に加え、ICT の進捗は日進月歩の様相を呈しており、教材の電子化に呼応するかの如く、教室内における電子黒板とタブレットの使用は今後学びの在り方を大きく変容させようとしているが、そのような大きな変革の中にあって、外国語教育としての英語教育の在り方、とりわけ小中高の成果を受けて行う大学の英語教育の在り方は、今後十分な検討が必要になってくるであろう。2020 年までに辿るべき道程と 2020 年以後辿るべき道程を見定めた言語政策議論が必要となるであろう。

参考文献

1. O'Malley, J.M. and Chamot, A.U. 1990. Learning Strategies in Second Language Acquisition, C.U.P.
2. Oxford, R. 1989. Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know: New York: Newbury House.
3. Cohen, A.D. and E. Macaro (eds.) 2007. Language Learning Strategies, O.U.P.
4. Griffiths, C. (ed.) 2008. Lessons from Good Language Learners, C.U.P.
5. Council of Europe. 2001. Common European Framework of References for Languages: Learning, Teaching, Assessment, C.U.P.
6. 吉島茂・大橋理枝（他）訳・編、2004 年、『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、東京：朝日出版社。

7. 木村松雄（編著）、2011年、『新版英語科教育法』学文社．
8. 矢野安剛・本名信行・木村松雄・木下正義（編著）、2011年、『英語教育学大系第2巻英語教育政策―世界の英語教育政策論をめぐって』、大修館書店．
9. 木村松雄・遠藤健治、2010年3月、青山学院大学文学部「紀要」第51号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2009年）」
10. 木村松雄・遠藤健治、2011年3月、青山学院大学文学部「紀要」第52号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2010年）」
11. 木村松雄・遠藤健治、2012年3月、青山学院大学文学部「紀要」第53号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2011年）」
12. 木村松雄・遠藤健治、2013年3月、青山学院大学文学部「紀要」第54号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2012年）」
13. 木村松雄・遠藤健治、2014年3月、青山学院大学文学部「紀要」第55号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2013年）」
14. 木村松雄・遠藤健治、2015年3月、青山学院大学文学部「紀要」第56号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2014年）」
15. 木村松雄・遠藤健治、2011年1月、「青山スタンダード論集」第6号、「英語熟達度、英語学習方略、英語学習への意識に特化した経年的研究（2010年）」
16. 木村松雄・遠藤健治、2012年1月、「青山スタンダード論集」第7号、「TOEFL-ITP、SILL、英検CAN-DO Listsを用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2011年）」
17. 木村松雄・遠藤健治、2013年1月、「青山スタンダード論集」第8号、「TOEFL-ITP、SILL、英検CAN-DO Listsを用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2012年）」
18. 木村松雄・遠藤健治、2014年1月、「青山スタンダード論集」第9号、「TOEFL-ITP、SILL、英検CAN-DO Listsを用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2013年）」
19. 木村松雄・遠藤健治、2015年1月、「青山スタンダード論集」第10号、「TOEFL-ITP、SILL、英検CAN-DO Listsを用いた英語熟達度と英語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2014年）」
20. 木村松雄（監修）、2015年5月、『青山学院4－4－4一貫制英語教育構想』学文社．

付表 1. 海外生活期間と性別ごとの方略得点

項目	群	男性		女性		期間の主効果 F (2, 309)	性別の主効果 F (1, 309)
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1. 英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える。	なし群	3.47	1.30	3.56	1.02	ns	ns
	短期群	3.63	1.30	3.84	1.19		
	長期群	3.27	1.03	3.50	.93		
2. 覚えやすいように文の中で新語を使う。	なし群	3.06	1.17	3.11	1.08	4.851**	ns
	短期群	4.13	1.13	3.50	1.02		
	長期群	3.05	1.21	3.45	1.03		
3. 単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける。	なし群	3.34	1.45	3.73	1.11	ns	ns
	短期群	3.88	0.99	3.91	1.25		
	長期群	3.36	1.40	3.15	1.23		
4. 単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える。	なし群	3.23	1.31	3.40	1.21	ns	ns
	短期群	4.00	1.41	3.78	1.16		
	長期群	3.41	1.33	3.45	1.21		
5. 新語を覚えるときには韻を使う。	なし群	2.47	1.35	2.63	1.32	ns	5.128*
	短期群	2.13	1.13	3.06	1.16		
	長期群	2.32	1.13	2.67	1.28		
6. 新語を覚えるときに単語カードなどを使う。	なし群	2.28	1.39	2.71	1.46	ns	4.773*
	短期群	1.63	0.92	2.53	1.57		
	長期群	2.41	1.44	2.67	1.55		
7. 新語を身体で表現して覚える。	なし群	2.02	1.29	2.46	1.31	ns	ns
	短期群	2.13	1.55	2.72	1.51		
	長期群	2.23	1.27	2.24	1.16		
8. 授業の復習をよくする。	なし群	2.89	1.22	3.23	.96	ns	8.181**
	短期群	2.38	1.06	3.06	1.05		
	長期群	2.50	1.06	2.97	1.12		
9. 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく。	なし群	2.81	1.31	3.28	1.22	ns	13.493***
	短期群	2.13	0.99	3.19	1.47		
	長期群	2.45	1.30	3.22	1.21		
10. 新語は数回書いたり言ったりする。	なし群	3.79	1.50	4.11	1.09	ns	ns
	短期群	3.88	1.46	4.19	.90		
	長期群	3.73	1.16	4.07	.99		
11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話そう心掛ける。	なし群	3.83	1.26	3.82	1.04	14.416***	ns
	短期群	4.63	0.74	4.47	.80		
	長期群	4.50	0.91	4.60	.64		
12. 英語の発音練習をする。	なし群	3.64	1.37	3.83	1.18	ns	ns
	短期群	4.00	0.93	4.19	1.00		
	長期群	3.41	1.37	3.73	1.27		
13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う。	なし群	3.47	1.21	3.31	.99	4.827**	ns
	短期群	3.88	1.13	3.81	1.06		
	長期群	3.77	1.15	3.87	.98		
14. 積極的に英語で会話を始める。	なし群	3.04	1.28	2.86	1.01	21.413***	ns
	短期群	3.50	1.41	3.09	1.20		
	長期群	4.05	0.95	4.02	1.10		
15. 英語のラジオ・テレビ番組（NHK 等）や英語の映画を見る。	なし群	3.36	1.45	3.62	1.29	12.067***	ns
	短期群	4.25	1.16	4.16	1.17		
	長期群	4.36	0.90	4.33	1.05		
16. 英語で読み物を読むのが楽しい。	なし群	3.36	1.22	3.42	1.07	ns	ns
	短期群	3.50	1.07	3.88	1.04		
	長期群	3.36	1.36	3.98	1.08		
17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く。	なし群	2.55	1.32	2.71	1.28	19.418***	ns
	短期群	3.75	1.16	3.41	1.36		
	長期群	3.77	1.34	3.75	1.27		
18. 英語を読むとき、まずスキミング（通し読み）をしてから再び前に戻って注意深く読む。	なし群	2.72	1.39	3.01	1.21	ns	ns
	短期群	2.38	1.69	3.06	1.34		
	長期群	2.91	1.34	3.17	1.26		
19. 英語の新語に似た語を日本語の中に探す。	なし群	2.70	1.43	2.71	1.17	4.196*	ns
	短期群	2.25	1.39	2.53	1.27		
	長期群	1.91	1.06	2.45	1.25		
20. 英語の中にパターンを見つけようとする。	なし群	3.74	1.39	3.46	1.10	7.246***	ns
	短期群	3.75	1.04	3.59	1.32		
	長期群	2.91	1.51	2.95	1.24		
22. 難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする。	なし群	3.77	1.31	3.66	1.08	3.628*	ns
	短期群	4.00	1.31	3.69	1.28		
	長期群	3.09	1.27	3.47	1.16		
22. 逐語訳（一語一語訳）はしないよう心掛ける。	なし群	3.77	1.31	3.65	.99	ns	3.903*
	短期群	3.63	1.51	4.25	1.02		
	長期群	3.68	1.13	4.22	.98		
23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する。	なし群	2.68	1.24	2.44	1.02	4.699**	ns
	短期群	2.63	1.19	2.69	1.23		
	長期群	3.14	1.36	3.03	1.22		

24. 知らない語を理解しようと推測する。	なし群	4.23	0.96	4.24	.78	ns	ns
	短期群	4.50	0.53	4.34	.79		
	長期群	4.05	0.72	4.30	.81		
25. 英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う。	なし群	3.64	1.15	4.19	.98	ns	5.423* 男性<女性
	短期群	3.63	1.19	4.38	.98		
	長期群	3.91	1.15	3.87	1.31		
26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る。	なし群	2.17	1.39	2.21	1.17	ns	ns
	短期群	2.43	1.51	2.56	1.41		
	長期群	2.50	1.22	2.18	1.35		
27. 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない。	なし群	3.68	1.16	3.71	1.13	ns	ns
	短期群	4.13	1.46	3.59	1.10		
	長期群	3.82	1.26	4.22	.92		
28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける。	なし群	2.89	1.37	2.78	1.12	6.562**	ns
	短期群	3.88	1.25	3.34	1.15		
	長期群	3.32	1.49	3.35	1.26		
29. 英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う。	なし群	4.52	0.66	4.45	.71	ns	ns
	短期群	4.38	0.74	4.56	.76		
	長期群	4.41	0.96	4.65	.68		
30. いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける。	なし群	3.38	1.19	3.32	1.06	7.867***	ns
	短期群	4.13	0.99	3.88	1.01		
	長期群	3.86	0.99	3.88	1.01		
31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する。	なし群	4.06	1.09	4.08	.77	ns	ns
	短期群	4.38	0.74	4.28	.92		
	長期群	3.77	0.75	4.22	.85		
32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く。	なし群	4.21	0.95	4.34	.75	ns	ns
	短期群	4.50	0.53	4.41	.67		
	長期群	4.14	0.77	4.20	.99		
33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよい心掛ける。	なし群	3.72	1.12	3.79	.98	ns	6.090* 男性<女性
	短期群	3.63	1.06	4.34	.94		
	長期群	3.36	1.05	3.85	1.13		
34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる。	なし群	3.30	1.18	3.34	1.01	9.983**	ns
	短期群	3.38	1.30	2.97	1.23		
	長期群	2.50	1.14	2.90	1.15		
35. 英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける。	なし群	3.34	1.26	3.18	1.13	ns	ns
	短期群	3.75	1.39	3.19	1.51		
	長期群	3.27	1.20	3.62	1.33		
36. できるだけ英語で読む機会を探す。	なし群	3.70	1.16	3.52	1.04	ns	ns
	短期群	3.75	0.89	3.78	1.13		
	長期群	3.36	1.18	3.87	1.08		
37. 英語の技能を高めるための明確な目標を持っている。	なし群	3.36	1.29	3.73	1.10	ns	ns
	短期群	4.38	0.74	3.69	1.28		
	長期群	3.18	1.26	3.78	1.30		
38. 自分の英語学習の進歩について考える。	なし群	3.70	0.95	3.84	1.02	4.992**	ns
	短期群	4.38	0.74	4.28	.81		
	長期群	3.36	1.33	3.78	1.08		
39. 英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける。	なし群	3.13	1.31	3.06	1.11	ns	ns
	短期群	3.25	1.39	3.31	1.23		
	長期群	2.73	1.20	3.15	1.26		
40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける。	なし群	3.53	1.18	3.14	1.18	5.160**	5.361* 女性<男性
	短期群	4.13	0.99	3.41	1.34		
	長期群	4.00	1.35	3.75	1.08		
41. うまくいったとき、自分をほめる。	なし群	3.32	1.29	3.38	1.14	ns	4.162* 男性<女性
	短期群	3.25	1.75	3.91	1.23		
	長期群	2.86	1.42	3.40	1.30		
42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく。	なし群	2.94	1.31	3.27	1.22	ns	ns
	短期群	3.25	1.28	3.19	1.33		
	長期群	2.77	1.38	2.85	1.44		
43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらったのむ。	なし群	4.02	1.24	4.19	.94	ns	ns
	短期群	4.25	1.16	4.34	.79		
	長期群	3.77	1.11	4.30	.94		
44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう。	なし群	2.87	1.39	3.03	1.25	7.369***	ns
	短期群	4.00	1.20	3.78	1.13		
	長期群	3.36	1.26	3.45	1.27		
45. 他の人と英語を使う練習をよくする。	なし群	2.50	1.44	2.34	1.01	ns	ns
	短期群	2.50	1.41	2.78	1.21		
	長期群	2.64	1.26	2.90	1.32		
46. 困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める。	なし群	2.98	1.29	2.93	1.30	ns	ns
	短期群	2.75	1.49	3.22	1.26		
	長期群	3.09	1.41	3.35	1.33		
47. 英語で質問をよくする。	なし群	2.54	1.21	2.23	.91	13.532***	ns
	短期群	2.63	1.30	2.94	1.32		
	長期群	3.36	1.22	3.13	1.26		

48. 英語話者の文化を学ぶよう心掛ける。	なし群	3.30	1.35	3.64	1.11	ns	ns
	短期群	3.50	1.31	4.06	1.13		
	長期群	3.73	1.20	3.72	1.25		
49. 特定の日本人の英語の熟達者を意識している。	なし群	3.02	1.51	3.01	1.38	3.878*	ns
	短期群	4.38	0.92	3.25	1.39		
	長期群	2.91	1.51	3.08	1.23		
50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う。	なし群	4.22	1.17	4.40	.86	6.671**	10.190**
	短期群	4.25	1.16	4.66	.65		
	長期群	3.32	1.43	4.30	1.06		
51. 辞書をよく引く。	なし群	3.30	1.24	3.67	1.11	ns	9.373**
	短期群	3.00	1.51	3.78	1.04		
	長期群	3.18	1.18	3.75	1.05		
52. 自分で考えた英語ノートを活用する。	なし群	2.37	1.27	2.66	1.32	ns	9.155**
	短期群	1.38	0.52	2.50	1.41		
	長期群	1.95	1.36	2.52	1.32		
記憶ストラテジー	なし群	2.84	0.81	3.12	.56	ns	3.714**
	短期群	2.89	0.49	3.29	.52		
	長期群	2.78	0.62	3.04	.59		
認知ストラテジー	なし群	3.32	0.71	3.33	.51	6.196**	ns
	短期群	3.57	0.57	3.64	.57		
	長期群	3.47	0.47	3.69	.58		
補償ストラテジー	なし群	3.51	0.56	3.60	.51	3.709*	ns
	短期群	3.85	0.68	3.80	.61		
	長期群	3.67	0.51	3.76	.57		
メタ認知ストラテジー	なし群	3.64	0.72	3.68	.67	ns	ns
	短期群	4.03	0.64	3.87	.73		
	長期群	3.42	0.41	3.79	.82		
情意ストラテジー	なし群	3.23	0.75	3.21	.77	ns	ns
	短期群	3.47	0.91	3.45	.78		
	長期群	3.09	0.65	3.29	.79		
社会ストラテジー	なし群	3.07	0.96	3.06	.73	4.562*	ns
	短期群	3.27	0.80	3.52	.80		
	長期群	3.33	0.82	3.48	.89		
英語を日常場面で使用する	なし群	2.92	0.77	2.85	.64	20.273***	ns
	短期群	3.55	0.77	3.31	.72		
	長期群	3.50	0.50	3.46	.74		
自覚的英語学習態度	なし群	3.52	0.72	3.60	.68	ns	ns
	短期群	3.80	0.59	3.79	.70		
	長期群	3.24	0.41	3.66	.82		
補償的態度	なし群	3.26	0.92	3.19	.82	ns	ns
	短期群	3.41	0.79	3.50	.98		
	長期群	3.39	0.77	3.49	.92		
単語記憶	なし群	3.01	1.09	3.25	.86	ns	ns
	短期群	3.33	0.78	3.58	.88		
	長期群	3.03	0.97	3.09	.93		
神経質な英語学習態度	なし群	3.19	1.00	3.26	.80	3.746*	ns
	短期群	3.67	0.78	3.52	.78		
	長期群	3.02	1.02	3.08	.84		
能動的英語学習態度	なし群	3.53	0.99	3.47	.88	ns	ns
	短期群	3.63	0.58	3.83	1.02		
	長期群	3.36	1.13	3.93	.97		
概括的理解	なし群	3.72	0.88	3.68	.90	ns	ns
	短期群	3.88	0.79	3.92	.79		
	長期群	3.75	0.92	4.22	.71		
能動的英語使用態度	なし群	3.10	0.68	3.04	.58	16.671***	ns
	短期群	3.51	0.57	3.44	.71		
	長期群	3.49	0.41	3.64	.62		
勉強的態度	なし群	3.46	0.73	3.62	.58	5.780**	7.314**
	短期群	3.44	0.21	3.72	.58		
	長期群	3.04	0.61	3.44	.69		

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

付表 2. 海外生活期間と性別ごとの CAN-DO 得点

項目	群	男性		女性		期間の主効果 F (2, 308)	性別の主効果 F (1, 308)
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
53. 興味・関心のある話題に関するままとりのある話を理解することができる。(講演、講義など)	なし群	3.11	1.20	3.24	1.09	28.330***	ns
	短期群	4.38	0.92	3.87	1.15		
	長期群	4.27	0.94	4.30	.81		
54. テレビやラジオのニュース番組を聞いて、その要点を理解することができる。	なし群	2.96	1.09	3.10	1.01	35.977***	ns
	短期群	4.38	0.74	3.69	.93		
	長期群	4.23	1.11	4.17	.81		
55. 観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる。	なし群	3.07	1.08	3.10	1.02	33.544***	3.873*
	短期群	4.63	0.74	3.66	.97		
	長期群	4.23	0.97	4.18	.91		
56. 公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる。	なし群	3.43	1.15	3.64	.97	21.343***	ns
	短期群	4.50	0.76	4.06	.84		
	長期群	4.32	1.04	4.48	.72		
57. 交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる。	なし群	3.37	1.12	3.55	1.06	18.811***	ns
	短期群	4.38	0.92	3.84	.95		
	長期群	4.32	0.78	4.37	.84		
58. 自分の仕事や専門分野の内容であれば、電話で注文や問合せを聞いて、理解することができる。	なし群	2.72	1.09	2.68	1.09	25.051***	ns
	短期群	3.63	1.06	3.25	1.08		
	長期群	3.82	1.18	3.87	1.11		
59. 幅広い話題に関するままとりのある話を理解することができる。(一般教養的な講演や講義など)	なし群	2.65	1.08	2.71	.96	38.168***	8.290**
	短期群	4.38	0.92	3.09	.89		
	長期群	3.95	1.00	3.78	.98		
60. 社会的な話題に関する話を理解することができる。(環境問題に関する講演など)	なし群	2.76	1.16	2.66	1.05	23.548***	12.216***
	短期群	4.25	1.04	2.94	1.13		
	長期群	3.95	1.09	3.52	.98		
61. 会議に参加して、その内容を理解することができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	なし群	2.65	1.22	2.49	1.05	23.693***	ns
	短期群	3.25	1.04	3.00	1.11		
	長期群	3.91	1.15	3.50	1.13		
62. テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる。	なし群	2.67	1.12	2.59	.97	18.795***	6.726**
	短期群	3.75	1.16	2.97	1.06		
	長期群	3.77	1.11	3.30	1.08		
63. いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる。	なし群	3.00	1.21	3.26	1.04	22.830***	ns
	短期群	3.75	1.04	3.63	1.10		
	長期群	4.23	1.07	4.13	.85		
64. 調べたことについて、ままとりのある話をする。(課題の発表、プレゼンテーション)	なし群	2.57	1.19	2.62	1.01	21.405***	ns
	短期群	3.38	0.52	2.88	1.24		
	長期群	3.64	1.00	3.58	.98		
65. 自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	なし群	2.72	1.24	2.47	1.03	20.594***	4.676*
	短期群	3.13	0.64	2.78	1.10		
	長期群	3.91	0.87	3.35	1.13		
66. 商品やサービスについて、苦情を言うことができる。(商品の故障、サービスの内容など)	なし群	2.67	1.23	2.23	.99	27.098***	7.492**
	短期群	3.38	1.41	2.75	1.32		
	長期群	3.95	1.17	3.47	1.27		
67. 公共の施設で簡単な用を足すことができる。(外国の郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど)	なし群	2.98	1.39	3.00	1.20	26.941***	ns
	短期群	3.75	1.58	3.75	1.14		
	長期群	4.23	1.02	4.27	.84		
68. 病院などで健康状態を伝えることができる。	なし群	3.09	1.26	2.91	1.11	24.233***	4.975*
	短期群	4.25	0.89	3.38	1.16		
	長期群	4.18	0.85	4.02	.98		
69. 簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる。(歯医者や美容院の予約など)	なし群	3.15	1.33	2.95	1.20	25.928***	ns
	短期群	3.88	1.55	3.66	1.15		
	長期群	4.32	0.78	4.23	.93		
70. 読んだ本や見た映画について、そのあらすじを述べる。	なし群	2.67	1.30	2.75	1.14	28.824***	ns
	短期群	4.13	1.13	3.25	1.32		
	長期群	4.05	0.95	3.88	1.06		
71. 社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	なし群	2.63	1.25	2.34	1.04	17.009***	10.834**
	短期群	3.75	1.16	2.63	1.26		
	長期群	3.64	1.05	3.22	1.17		
72. 会議に参加してやりとりをすることができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	なし群	2.41	1.22	2.20	.98	25.193***	ns
	短期群	3.00	1.07	2.56	1.01		
	長期群	3.59	1.30	3.35	1.20		
73. 幅広い内容について、電話で交渉することができる。(予定の変更、値段の交渉など)	なし群	2.48	1.17	2.12	1.05	25.958***	ns
	短期群	3.00	1.51	2.47	1.19		
	長期群	3.55	1.22	3.53	1.23		
74. 相手や状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けることができる。	なし群	2.78	1.33	2.47	1.22	17.644***	ns
	短期群	3.13	1.25	3.25	1.37		
	長期群	3.77	1.23	3.67	1.11		
75. 英文の種類や読む目的に応じて、適切に読みこなすことができる。(新聞をさっと読む、評論文を注意深く読む、小説を楽しみながら読む)	なし群	2.98	1.09	3.02	1.10	9.863***	ns
	短期群	3.75	1.16	3.22	.97		
	長期群	3.73	1.24	3.63	.88		

76. 英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる。 (The Japan Times/The Daily Yomiuri/The New York Times など)	なし群 短期群 長期群	2.83 3.75 3.68	1.18 1.04 1.29	2.72 3.34 3.52	1.03 1.15 1.03	15.348*** なし群<短期群=長期群	ns
77. まとまった量の英文の要点を理解することができる。(講義や研修 での課題図書や資料など)	なし群 短期群 長期群	2.72 4.25 3.64	1.07 0.71 1.33	2.78 3.13 3.58	1.01 .98 1.01	20.032*** なし群<短期群=長期群	4.710* 女性<男性
78. 仕事に関する手紙 (Eメール) を理解することができる。	なし群 短期群 長期群	3.02 4.25 4.05	1.14 0.89 1.00	2.97 3.50 3.93	1.02 1.08 1.02	23.433*** なし群<短期群=長期群	ns
79. 商品の取り扱い説明書を理解することができる。(電化製品など)	なし群 短期群 長期群	3.24 4.25 4.14	1.16 1.04 1.04	2.97 3.69 3.88	1.00 .97 1.09	20.035*** なし群<短期群=長期群	4.354* 女性<男性
80. 雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる。 (TIME/Newsweek など)	なし群 短期群 長期群	2.96 4.13 3.86	1.07 1.13 1.13	2.77 3.25 3.61	.92 1.08 .95	20.662*** なし群<短期群=長期群	7.139** 女性<男性
81. 文学作品を理解することができる。(小説など)	なし群 短期群 長期群	2.76 3.38 3.55	1.14 1.19 1.30	2.93 3.22 3.65	1.02 1.13 1.12	10.854*** なし群<長期群	ns
82. 資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる。(報告 書、統計的な資料など)	なし群 短期群 長期群	2.85 4.13 3.55	1.03 0.99 1.22	2.64 3.03 3.38	.96 1.12 1.14	14.427*** なし群<短期群=長期群	8.005** 女性<男性
83. 留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することがで きる。	なし群 短期群 長期群	2.65 4.13 3.86	1.06 0.99 1.17	2.55 3.22 3.68	1.02 1.07 1.14	31.603*** なし群<短期群=長期群	5.017* 女性<男性
84. 興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる。 (簡単なレシビ、器具の使い方など)	なし群 短期群 長期群	3.26 3.75 3.73	1.14 1.28 1.08	3.42 3.74 3.92	1.08 1.15 1.01	4.939** なし群<長期群	ns
85. 興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要 約を書くことができる。(講義の内容、雑誌や新聞の記事など)	なし群 短期群 長期群	3.09 3.63 3.82	1.17 1.06 1.01	3.13 3.45 3.73	1.01 1.26 1.04	9.068*** なし群<長期群	ns
86. 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことが できる。	なし群 短期群 長期群	3.43 4.00 4.05	1.07 0.93 0.90	3.56 3.87 3.95	1.06 .96 1.00	6.079** なし群<長期群	ns
87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食 べ物、祝日、お祭りなど)	なし群 短期群 長期群	3.15 4.13 3.77	1.05 0.99 0.92	3.59 3.77 3.92	.97 .88 1.06	7.207*** なし群<短期群=長期群	ns
88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことがで きる。(留学の志望動機など)	なし群 短期群 長期群	3.33 3.63 4.00	1.08 1.06 0.93	3.53 3.87 4.07	1.00 .88 1.01	8.288*** なし群<長期群	ns
89. 自分の専門分野の内容であれば、注文や問合せに対して簡単な返 事を書くことができる。	なし群 短期群 長期群	3.04 3.50 3.59	1.11 0.93 1.18	2.88 3.55 3.75	.99 1.02 1.12	11.411*** なし群<短期群=長期群	ns
90. 社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くこ とができる。(環境問題など)	なし群 短期群 長期群	2.96 3.38 3.55	1.07 0.74 0.96	2.86 3.23 3.32	1.04 1.23 1.03	5.987** なし群<長期群	ns
91. 自分の行なった調査について、まとまりのある文章を書くことが できる。(レポート、報告書など)	なし群 短期群 長期群	2.83 3.75 3.45	1.10 0.71 1.14	2.76 3.19 3.47	1.00 1.05 1.03	11.586*** なし群<短期群=長期群	ns
92. 商品やサービスについて、苦情を申し立てる文章を書くことがで きる。(商品の故障、サービス内容など)	なし群 短期群 長期群	2.65 3.00 3.36	0.99 1.07 1.00	2.40 3.06 3.38	.95 1.06 1.04	16.779*** なし群<短期群=長期群	ns
93. 社会的な話題に関する雑誌記事や新聞記事の要約を書くことが できる。(社説や論文など)	なし群 短期群 長期群	2.54 3.25 3.41	1.09 0.89 0.96	2.45 2.90 3.17	1.00 .98 1.04	14.594*** なし群<短期群=長期群	ns
94. 講義や会議の要点のメモをとることができる。	なし群 短期群 長期群	2.80 3.38 3.50	1.05 1.19 1.10	2.74 3.06 3.48	1.01 1.06 1.10	10.886*** なし群<長期群	ns
Listening 準 1 級	なし群 短期群 長期群	3.11 4.31 4.20	0.95 0.69 0.90	3.22 3.73 4.23	.81 .79 .72	41.145*** なし群<短期群<長期群	ns
Listening 1 級	なし群 短期群 長期群	2.75 3.88 3.96	1.02 0.91 0.95	2.74 3.13 3.65	.86 .84 .86	33.582*** なし群<短期群<長期群	5.844* 女性<男性
Listening Total	なし群 短期群 長期群	2.94 4.11 4.09	0.95 0.68 0.89	3.00 3.45 3.96	.78 .77 .74	42.014*** なし群<短期群<長期群	ns
Speaking 準 1 級	なし群 短期群 長期群	2.84 3.70 4.04	1.12 0.71 0.72	2.70 3.21 3.83	.87 .94 .83	38.338*** なし群<短期群<長期群	ns
Speaking 1 級	なし群 短期群 長期群	2.58 3.22 3.64	1.16 0.95 1.09	2.28 2.73 3.44	.92 1.03 1.03	27.433*** なし群<短期群<長期群	3.872* 女性<男性

Speaking Total	なし群	2.74	1.09	2.55	.84	37.059***	3.976* 女性<男性
	短期群	3.52	0.71	3.03	.95		
	長期群	3.89	0.81	3.69	.87		
Reading 準1級	なし群	2.96	0.90	2.89	.84	25.367***	4.106* 女性<男性
	短期群	4.05	0.83	3.38	.84		
	長期群	3.85	1.09	3.71	.85		
Reading 1級	なし群	2.80	0.88	2.72	.79	26.385***	4.909* 女性<男性
	短期群	3.94	0.81	3.18	.88		
	長期群	3.70	1.07	3.58	.97		
Reading Total	なし群	2.89	0.84	2.82	.77	28.472***	4.925* 女性<男性
	短期群	4.00	0.74	3.29	.82		
	長期群	3.78	1.06	3.65	.87		
Writing 準1級	なし群	3.22	0.97	3.35	.84	10.513***	ns
	短期群	3.77	0.80	3.71	.92		
	長期群	3.83	0.84	3.89	.89		
Writing 1級	なし群	2.76	0.91	2.64	.81	16.262***	ns
	短期群	3.35	0.75	3.09	.94		
	長期群	3.45	0.89	3.36	.91		
Writing Total	なし群	3.01	0.88	3.03	.79	14.356***	ns
	短期群	3.58	0.70	3.43	.89		
	長期群	3.66	0.84	3.65	.86		

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001